

# ニュースレター

## 「アンラーニングプロジェクト09」の 「オープニング」での論議から

「アンラーニングプロジェクト09」では、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない——『今のような生』の創造への〈鍵〉をさぐる」をテーマとして、5月10日(日)の「オープニング」を皮切りに、そうした課題を解くことに向けて、私たちが手にしている／手にすることができる〈鍵〉をさぐりあうことを試みています。以下、「アンラーニング09」の「オープニング」での論議のアウトラインを紹介します。

### □「アンラーニング09」では何を指すのか

5月10日(日)の「オープニング」では、最初に、「グローバル経済の破綻は私たちの失敗ではない——『今のような生』の創造への〈鍵〉をさぐる」という今年度の「アンラーニング」のテーマの設定のねらいや、今年度の進め方についての提案・説明が行われました。

昨年度の「アンラーニング」では、「資本主義を見限る」をテーマとして、「マンガ 反資本主義入門」を素材に、現在のネオリベ・グローバル経済に対する世界規模での抵抗・反撃がどのように現れているかを探りました。また、昨年08年は、富山を発祥の地とする「米騒動」からちょうど90年目でしたが、その「米騒動」の運動史的な意義を考え合いたいという思いから、「アンラーニング」の特別企画として、「ラウンドテーブル：『米騒動』から90年——私たちは『米騒動』から何を受けとるか？」を行いました。そこでの論議を受けて、昨年度の「アンラーニング」のプログラムの後半では、『現代の米騒動』をさぐる」というテーマで、「現代の米騒動」と自称／他称されている、「フリーター」の労働組合や反貧困の運動といった現在の「保障されざる者」たちの動きから、90年前の「米騒動」のように「生」の保障要求を集団的に行う、いわば、「騒動による団体交渉」の現在的な再生の可能性を探りました。

昨年度の「アンラーニング」では、併せて、昨年の洞爺湖G8サミットに対する対抗アクションを通じて、今までにない運動間の横断的な結合や新しい運動のスタイルが、この国でどのように生み出されようとしているかにも注目しました。洞爺湖サミットへの対抗アクションの中では、それまでのサミットの30数年の「歩み」自体が問い直されていました。75年のフランス・ランブイユでの最初のサミットの開催は、

70年代初頭のドルショック・オイルショック等による「先進国」の世界支配の揺らぎに対抗して、IMFや世界銀行といった国際金融機関の創設を軸に「先進国」優位の世界秩序を再確立しようとする動きと軌を一にするものでした。それによって、債務不履行状態に陥ったアフリカ・ラテンアメリカ諸国に強制された「構造調整」政策を、後に「先進国」内部にまで「応用」したのが現在のネオリベ「改革」だということが、この国での洞爺湖サミット対抗アクションの中で改めて思い起こされていました。

そのように、第三世界での「構造調整」政策まで含めれば、30数年の長きに渡り、世界の政治・経済の支配的なパラダイムとして、全世界的に人間の「生の保障」を破壊し続けてきたネオリベ・グローバル経済路線が、今、「暴走」のあげくの自業自得として「自壊」しつつあります。しかし、昨年末からの金融危機を口実とする「派遣切り」・大量解雇の横行に表れているように、ネオリベ・グローバル資本主義はその延命のために、自らの破綻の「つけ」を私たちの「生」の保障の更なる破壊として私たちに押しつけようとしてきています。そのような意味でも、現在、私たちに否応なく強いられる「生」の困難を、人間の「生」を保障しない資本主義を「具体的に見限る」ことへ転化させ、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを、新たな「コモン」として、私たちがどのように自らの手で生み出しようのかが、考え合うことが切実に求められているはずです。

「アンラーニング」の中でも何度も触れられてきた〈68年〉の運動や、現在の「保障されざる者」たちのアクションや相互扶助の実践、また、集団で米屋の店頭を占拠して高騰前の値段での米の廉売を要求するという「騒動による団体交渉」を通じた「米価の自主決定」を行った90年前の「米騒動」——それらを重ね合わせた連続線上にそのための手がかりを、かいま見ることができるよう感じています。

そこに示唆されているような、市場経済の外での「生」の創造のための仕組みを私たちがどのように生み出しようのかという課題に向けて、今、私たちが手にしている／手にすることができる〈鍵〉をさぐることが、今年度の「アンラーニング」の大きな課題です。それに向けて、利潤追求ではなく、人間のベーシック・ニーズを充たすためのものとしての経済システムの転換や、南米を中心として近年活発に展開されている自律的な「生存空間」の構築の実践、また、全ての者に無条件で生存を保障するための「基本所得」などを具体的な論議の題材として、資本主義を「具体的に見限る」ための手がかりをさぐりあうことを試みていきたいと考えています。

## □「社会運動の現在の課題」とは

以上のような今年度の「アンラーニング」のテーマや進め方をめぐる提案・説明を更に補うものとして、今回の「オープニング」では、併せて、「社会運動の現在の課題——『今のようではない生』の創造への〈鍵〉をさぐる」と題する「提起」が、約1時間余りにわたって行われました。以下は、その「提起」の概要です。

今、人々を追い詰めてきたネオリベ・グローバル資本主義自体が大きなたまらずきの中にあ

るということ、人々の側からこの非人間的な資本主義を否定し返すチャンスにしようという気運が生まれつつあります。資本主義を「具体的に見限る」という今年度の「アンラーニング」のテーマは、一見大げさで抽象的なもののように、実はこの日本列島で生きている限りにおいて、多くの人々の実感においても「リアル」になりつつあるのではないのでしょうか。

そのテーマを更に補足・説明するために、昨年度の『米騒動』から90年」の前後に考えていたことから少しお話ししたいと思います。かつての幕藩体制期などでは、支配層が「主」としてあることに対して、民衆の側は「客分」として存在していて、普段は政治を為政者にまかせて政治的なことには無関心に生活するというのが通常でした。しかし、飢饉や悪政などで生活が脅かされるような時には、民衆の側は一揆や打ち壊しといった反乱・抵抗を通じて為政者に「仁政」を求めるとというのが、「客分」としての伝統的な民衆のあり方でした。そのような意味で、近代に入ってから「客分」としての民衆による最後の騒動が、90年前の「米騒動」だったと言ってもいいでしょう。

そのように、権力奪取や、既成の権力構造への参加を目指すのではなく、集団的な直接行動を通じて「生の保障」を要求する存在としての「客分」の現在の「転生」の可能性を、この国での「保障されざる者」たちの運動の中に見ることができるのではないのでしょうか。この間のネオリベ「改革」の中では、「お前の『生き難さ』は、自立できていないお前の『自己責任』だ」ということを、ずっと言われ続けてきました。それに対しては、きっぱりと「私たちの貧困は私たちの『自己責任』ではない」と言わなければならないし、「米騒動」のことを考えようとした際に自分たちが手にした考え方で言えば、ネオリベ「市場原理主義」からいかに「逃散」するかということが、私たちにとっての「自律(オートミー)」であるはずで

それは更に言えば、自分の生き方を計る尺度を近代社会や、ネオリベの価値観にゆだねないということでしょう。また、「客分」の現在の「転生」ということを別の角度から捉え直すならば、それは、ネオリベによる「社会的なもの」の縮減に対して、「生の無条件の肯定」という理念から、「社会的なもの」のすえ直しを求めるということでもあるでしょう。そのように、「市場原理主義」からいかに「逃散」して、自律的な価値観で自分の生き方を組み立てていくことを、「全ての生の無条件の肯定」のための仕組みをどのように作りだすかということで「裏打ち」していく、一言で言えば、「自律」と「保障」との結合ということが、私たちが資本主義を「具体的に見限る」ということの内実になるでしょう。

今回の「提起」のレジメの中でも書きましたが、『今のようではない』生の創造＝もう一つの生き方／働き方／支え合い方を、社会／経済のレベルで、現実的に・具体的に、集団として蓄積していく」という問題意識が、ようやくある段階にまで到達してきているように思います。昨年度の後半の「アンラーニング」では、「フリーター」の労働組合といった、現在のこの国の「保障されざる者」たちの運動を、現代の「米騒動」として捉え直すことを試みましたが、そこで取り上げたフリーター労組の人たちの書いた文章を、今日のレジメにもいくつか載せました。「生の新たな様式を発明しようではないか。資本主義＝市場的交換とは別の友愛に満ちた相互的扶助的交換を発明しようではないか」、「むしろ、惰民として、単なるプアとして生き延びる技と知恵こそが重要なのだ」といった言葉をそこに引用しましたが、自分たちが言いたいのもそのようなことなのです。フリーター全般労組というところは、既成労組とは全然違うセンスで労働運動を行っているのですが、そこで言われている言葉を使えば、私たちが目指そうとしているのは、「賃労働ではなく、自由と生存を擁護し、新たな生のかたちを生み出していく運動...つまり単なる労働運動ではなく、生存運動」ということになるでしょう。

この国よりもはるか以前からネオリベ「改革」に攻撃されてきた地域が中南米ですが、それを逆転させていこうという動きが、90年代から登場してきています。今日の資料の中に、広瀬純とアルゼンチンの運動集団との対話から生まれた、「闘争のアセンブレイア」という本の中からの引用を載せました。その文章の中の「ピケテロ運動」というのは、この国の「派遣切り」当事者に近いような失業者たちが、工場で闘うのではなく、首都のブエノスアイレスと地方を結ぶ幹線道路を封鎖して物流を阻止するという運動です。それと同時進行で、ブエノスアイレスの郊外の放棄された農地の「自主耕作」や、倒産した工場での「自主管理」による生産活動も行われています。そこに現れているように、生きていく上で自分の労働力を企業に買ってもらうことを必ずしも前提にするのではなく、自らの生産的活力というものを自分たちの生きるためのために使うものへと「逆転」させているのです。

01年から03年ぐらいまでが「ピケテロ運動」の最盛期で、現在は運動と現政権との関係は微妙なものらしいのです。しかし、そうではあれ、ここに引用した言葉で言えば、そうした『完全雇用』の地平にはもはや立っていない失業者たちの運動は、『失業』それ自体から、ポジティブな意味を引き出そうとする試みであり、「資本制システムに回収されないような自律的な経済空間あるいは生産空間をそれぞれのバリオにおいて構築するという、驚くべきプロジェクト」なのです。——このところ、改めて着目されている谷川雁と「大正行動隊」、その後の「退職者同盟」が、今日の私たちに指し示しているのも、まさにそのことに関わっているのではないかと思います。

以上、いくつかの引用を経由して、自分のイメージをふくらますようなことをしてきましたが、そのように、全世界的な運動の課題として、資本主義システムや市場経済に依存しない「新しい生」のあり方をどのように人々の集団的な営みとして作りだすかが問われるところまで、現在、ようやくたどりついたということではないかと思います。そのような動きはこの国ではまだまだ弱いのですが、私たちの課題としては、そのような全世界的なレベルと同じところまでどのように肩を並べるのかが問われているように思います。そのような意味でも、私たちはどのように反資本主義的・市場主義的な「生」の形を生み出していくのかをめぐって、この一年で、論議を積み上げていかなければならないと感じています。

更に言えば、現在、人々を追い込むことの方が上がってきているわけですが、派遣労働者や、ホームレスの人たちがすぐ隣り合わせの場所で、同じように「生」の困難に直面しながら、互いに語り合うことができないという現状があります。それに対して、この国で「生」の困難に直面する者同士が、同じ言葉や理念を語り合うところにまで、どのようにたどり着くかということが、今年度の「アンラーニング」での大きなテーマです。

---

## アンラーニングプロジェクト09——この後の予定

●第5回 8月30日(日)午後1:30~4:30 サンフォルテ306号室

報告:「全ての者に無条件で基本所得を! ——山森亮「ベーシックインカム入門」(光文社新書)を読む」(Part2)

●第6回 10月11日(日)午後1:30~4:30 サンフォルテ306号室

報告:「まち／むらが編み上げあう『モラルエコノミー』の再生——ミニ・シンポ『まちの困民・むらの困民

08』報告書＋大野和興・西沢江美子『食大乱の時代』（七つ森書館）を読む」